

二〇二四年一〇月四日

双蝶のひそひそ話藤袴
鯛一尾丸ごと炊けり今年米
掃くもよし掃かざるもよし溢れ萩

うつぎ
千鶴
澄子

二〇二四年一〇月三日

小鳥来る聖書輪読せる窓に
古書店の奥の奥まで秋日射
気遣ひの杖の置かれし登山口
参道の左右を綴る曼珠沙華
石鎚の峰より発し川澄めり

あひる
みきお
千鶴
澄子
千鶴

二〇二四年一〇月二日

うち仰ぐ峡の棚田の稲架襖
風通ふたびに掃かるる萩の屑
横抱きに運ぶ案山子の軽さかな
草の花あひ持ち寄りし茶会かな
水澄むや水輪の主は何ならむ
笑む顔も泣き顔もある案山子かな

せいじ
むべ
なつき
康子
やよい
むべ

二〇二四年一〇月一日

異国語の客に梨剥く朝市女
秋天に槌音たかく宮普請

なつき
澄子

二〇二四年九月三日

教会の尖塔高く鳥渡る
蟪蛄の見得きるとき構へかな
秋の雲串刺しにせる飛行雲
風通ふ稔田捨て田隣りあひ

幸子
明日香
やよい
むべ

二〇二四年九月二九日

虫の音に一句もがなと長湯かな
象の鼻滑る遊具や木の実降る
百幹のさざめきやまぬ竹の春

うつぎ
なつき
澄子

二〇二四年九月二八日

舞へるとも吹かれをるとも秋の蝶
秋の蚊に刺される儘に庭仕事
団欒の灯の洩る路地や虫の声

風民
うつぎ
康子

毎日句会みのる選・二〇二四年一〇月七日